

各ヒューリスティックによって現われる認知バイアスの分類分け及び集団差の検討

平井敬大

ヒューリスティックとは、人間の思考様式のうちの1つである。無意識的に用いられる、簡便に問題を解決しようとする方法のことである。また認知バイアスも、人間の推論、判断のメカニズムであり、過去の経験に基づく偏見のために、判断が偏ったものとなることである。

亀田 (2020) はヒューリスティック・認知バイアス研究に対して以下のように指摘した。ナッジ的に政策に応用する行動経済学の現状のアプローチは縮小傾向にあり、今後政策・応用場面で認知バイアスを扱うための科学的な論拠を鍛えるためには、認知バイアスが作用する条件である境界条件を探索することが重要であるとした。

本研究では、利用可能性ヒューリスティック、代表性ヒューリスティック、感情ヒューリスティック、少数の法則、再認ヒューリスティック、プライミング効果、アンカリング効果、同調性バイアス、敵意帰属バイアス、後知恵バイアス、確証バイアス、連言錯誤、外集団均質性、現状維持バイアス、自己奉仕バイアス、中心特性効果の以上17種類について分類分けを行うことにした。また、これらのヒューリスティック・認知バイアスに集団差が見られるかどうかについても確認した。

本調査は大東文化大学社会学部の長瀬岳志氏と共同で実施された。大東文化大学の学生84名を対象に質問紙実験を行った。回答者の属性について、集団差を測るために両親の学歴、単身家庭の時期の有無についても質問した。各ヒューリスティック・認知バイアスについて、それぞれ異なる手法で現われやすさを示す項目を作成して、各ヒューリスティック・認知バイアスが現われる程度を測定した。

因子分析を行った結果、7つの因子が確認された。それぞれの因子グループ内の共通する要素を推測し、特に記憶の濃度に関わる因子、適応行動に関わる因子などが見られた。集団差について、68通りの分析を行ったが有意となったのは4通りだけであり、大学生において概ねヒューリスティック・認知バイアスは集団差による影響を受けないことが確認された。

因子分析によってグループ内の共通する要素を推測したことは、ヒューリスティックや認知バイアスにはいくつかの根本的な心理学的・神経学的基盤があることが示唆される。また、大学生において集団差はほとんど見られなかった。結果から応用性を考慮すると、本研究のような研究の必要性が見受けられる。